



You, Unlimited



Ryukoku

広報誌「龍谷」

2024 VOLUME 97

心理学部 森 彩花さん

Brand Story

世界は驚くべきスピードでその姿を変え、
将来の予測が難しい時代となっています。
いま必要なことは、「学び」を深めること。
「つながり」に目覚めること。
龍谷大学は「まごころある市民」を育てていきます。

自らを見つめ直し、他者への思いやりを発動する。
自分だけでなく他の誰かの安らぎのために行動する。
それが、私たちが大切にしている
「自省利他」であり、「まごころ」です。
その心があれば、激しい変化の中でも本質を見極め、
変革への一歩を踏み出すことができるはず。

探究心が沸き上がる喜びを原動力に、
より良い社会を構築するために。
新しい価値を創造するために。

私たちは、大学を「心」と「知」と「行動」の拠点として、
地球規模で広がる課題に立ち向かいます。
1639年の創立以来、貫いてきた進取の精神、
そして日々積み上げる学びをもとに、様々な人と手を携えながら、
誠実に地域や社会の発展に力を尽くしていきます。

豊かな多様性の中で、心と心がつながる。人と人が支え合う。
その先に、社会の新しい可能性が生まれていく。
龍谷大学が動く。未来が輝く。

You, Unlimited



広報誌「龍谷」

01 P01 Feature Article

巻頭特集 学長対談

『遊』が説く生きるヒントとは

Deportare Partners

代表 龍谷大学学長

為末大 × 入澤崇

02 P06 Ryukoku News

『龍谷大学ネイチャーポジティブ宣言』を发出 他

03 P14 People, Unlimited

安心・快適・エコなキャンパスに
思いを形にしたウォーターサーバー

米澤 亜美さん 国際学部

P16
高校生の身体と食事を科学的に解析
保護者も含め栄養サポート

中島 海斗さん 農学部

P18
人と人を「隔てる壁」から人と人を「ツナグ」ものへ
コロナ禍のアクリルボードに新たな価値を

森 彩花さん 心理学部

04 P20 Education, Unlimited

現地の人とともに考える
ラオスで知った国際協力の在り方

國重 裕 教授 経営学部

P24
新時代の高校と連携
学生と協働する「社会協創ネイティブ」を育成

高次連携推進室長
山崎 英恵 教授 農学部

05 P28 Research, Unlimited

観光産業と市民生活を両立するために
オーバーツーリズムの本質を考える

阿部 大輔 教授 政策学部

P32
ステマをはじめ不正なデジタル広告に
法の手で包囲網を

カライスコス アントニオス 教授 法学部

06 P36 Event Ryukoku Museum

壁画から見える交差する信仰の世界
太陽神と弥勒の謎めく関係性に迫る

岩井 俊平 龍谷ミュージアム 学芸員

07 P38 Connect, Unlimited

龍谷大学をつなぐ対談

多様な人、知恵との融合で創出をめざす
新しいソーシャル・イノベーション

株式会社革靴をはいた猫 龍谷大学大学院政策学研究科
代表取締役社長 研究科長

魚見 航大さん × 中森 孝文 教授

08 P42 My Campus

マイキャンパス

09 P44 News & Topics

最新情報

10 P49 Book Café

新刊紹介

01

Feature Article 巻頭特集 学長対談

Deportare Partners 代表 龍谷大学学長
為末 大 × 入澤 崇



『遊』が説く生きるヒントとは

Feature Article

People, Unlimited

Education, Unlimited

Research, Unlimited

Connect, Unlimited

News & Topics

陸上400mハードルにて、オリンピック・世界陸上で活躍した為末さんは、現役時代から競技を探求する「走る哲学者」とも呼ばれている。その発信されるメッセージに入澤学長は「仏教にも通じ、学生の人生の道しるべになる」と共鳴していたという。同じ広島県出身という縁のある二人がお互いに「生きるヒント」について照らし合った。

入澤: 為末さんに以前からお会いできるのを熱望しておりました。オリンピックに3度も出場されるなど輝かしい競技人生を送られた為末さんですが、過去の取材や著書では、敗北やスランプを機に、自己探求に至ったとあります。どのように立て直されたのでしょうか。

為末: 私は小中高、大学、社会人、プロアスリートの全力テゴリーでチャンピオンになり、敗者の経験がほとんどありませんでした。しかし、競技人生の後半は思うような結果を出すことができず、重圧と緊張からハードルを跳び越えられなくなった時期もあります。敗北と挫折に打ちのめされて「がんばってもダメなことがあるんだ」ということに気づかされました。その時の敗者の経験が私の人生において大きな学びとなり、引退後の今も役に立っています。

入澤: 為末さんのようなトップアスリートとして活躍できる選手はほんの一握り。圧倒的多数は「敗者」です。大学スポーツを見ても、大半が卒業と同時に競技を引退します。あるいは、大学入学と同時に、それまで続けていたスポーツを辞める学生も少なくありません。

為末: 確かにそうです。スポーツを続けていく難しさは私も重々感じていました。陸上競技の場合、勝者はたった一人。私は「勝てないの

であれば、なぜ命を燃やして競技に打ち込むのか」と葛藤の末、辿り着いたのは「ハードルが面白くて仕方ない」という明快な答えです。面白いから続けられる、喜びを味わえる。スポーツの本質は『遊』にあると思います。

入澤: 敗北や挫折から自問自答し、また歩みを進める。人生も同様です。

為末: はい。スポーツには人を育てる効果があります。挫折を経験することは、競技だけでなく、人生を立て直すチャンスであると私自身が実証しています。

入澤: スポーツはもちろん、私は、学生には大学生活のなかで、夢中になれる何かを見つけしてほしいと願っています。それには、為末さんが説く人生においての『遊』が重要だと思います。学修や責任を放棄して遊びに興じることではありません。毎日の学びや仕事を遊びにする。やらされるのではなく、自分自身が楽しく、無我夢中で取り組むという意味です。

為末: 遊びの何がすごいと言えば我を忘れて夢中になれることです。誰かに与えられた面白さは一時の刺激で終わってしまいます。自分の内からわき上がる面白さは、生涯にわたって、楽しみながら学び続けることができます。ここが目の前にあることを面白く感じる人と、面白いことに会うのを待っている人の決定的な違いではないでしょうか。

入澤: 子どもの頃、暗くなっても無我夢中で遊び続けたあの感覚ですね。楽しさや豊かさは自らにあり、自ら生み出さなければならない。ただ、混沌とする世界情勢もあり、未来が見えない、自らのゴールや目標を設定できないと悩み、戸惑う若い人が少なくありません。



為末 大

1978年広島県生まれ。スプリント種目の世界大会で日本人として初のメダル獲得者。男子400メートルハードルの日本記録保持者(2024年2月現在)。現在はスポーツ事業を行うほか、アスリートとしての学びをまとめた近著『熟達論: 人はいつまでも学び、成長できる』を通じて、人間の熟達について探求する。その他、主な著作は『Winning Alone』『諦める力』など。



入澤 崇

龍谷大学学長。1955年広島県因島生まれ。龍谷大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。専門は仏教文化学。1990年文学部仏教学科に着任。ベゼクリク石窟壁画の復元事業や数多くの仏教遺跡調査に従事。2004年から5年間アフガニスタン仏教遺跡学術調査隊の隊長を務める。龍谷ミュージアム館長、文学部長を経て、2017年4月に学長就任。

為末:スポーツはゴールが明確です。例えば陸上の100m競技であれば9秒台で走ることが目標になります。記録更新や大幅なルール変更がない限り、ゴールが大きく揺らぐことはほとんどありません。一方、社会はそうではありません。環境や状況が変わればゴールやそれに向かうプロセスも変わってしまいます。しかし、その度に右往左往しても構わないのです。若い人には柔軟に対応できる余白を持ってプロセス自体を楽しんでほしいと思います。ここで言う余白も遊びの要素です。

入澤:若い人が悩む原因としては、未来から逆算して考えるのでゴールが遠すぎて、何をすればいいのかわからなくなるのでしょう。

為末:複数のオリンピックに、子どもの頃からオリンピックに出場できると思っていたかと質問すると「イエス」と答えた選手はほぼゼロでした。ただ一つだけ共通した答えは「今日やるべき目標を設定し、練習後に振り返り反省する」そのことを毎日繰り返し実践していたということです。また、ある野球コーチからは、バッティング練習でバットにボールが当たった「その瞬間」の手応えや感覚を体で覚えることが大事なんだと聞きました。要するに「見えない未来よりも、今を捉え、今を積み重ねていく」ことで、目標達成や自己実現が成し遂げられるのではないのでしょうか。

入澤:私はタイで「歩行瞑想」という修行を見ました。今、左足が前に出たと、心の中で実況中継のようなことをしながら、ただひたすら「歩く」だけに集中するのです。これは「今この瞬間を生きている」ことに気づくことが目的で、為末さんがおっしゃる「今を捉え、今を積み重ねる」に繋がります。未来が見えずに悩みを抱えている学生の心に響くはずですよ。

為末:大人も未来のことは全くわかりませんが、道なき道もなんとかなる。遊びを通じて今を楽しみながら進めば、未来のゴールに辿り着くと背中を押してあげたいですね。

今、私が注力しているのは「寛容なスポーツの創出」。定義は「身体と環境の間で遊ぶこと」です。スポーツは上司と部下といった社会的関係を脱ぎ捨て、ともに楽しむことが可能です。国家間の緊張緩和のためにスポーツ大会が開催された歴史もあります。私は畑仕事に興味なのですが、家族や仲間と畑で身体を動かすと、気分爽快、幸福を感じます。これも私の定義ではスポーツです。特定の競技ではなく、引退もなく、心が軽くなる。緩やかなスポーツを広げていければと考えています。

入澤:すばらしいですね。肉体と精神は一体で、両方の健全を図ることで充実感や幸福感が得られる「心身一如」という仏教の概念に通じます。今回、お話を伺うほどに、為末さんが哲学者と称される所以がわかりました。

為末:私も仏教の思想に関心があります。オリンピックなど極限のプレッシャーがかかる大会で、普段通りの実力を発揮するには「忘我の境地」に達することが必要でした。そう考えると、スポーツは仏教に、仏教は哲学に結びついているのではないのでしょうか。

入澤:「人生は靴の中に小石が入っているようなもの。不安があっても当たり前。少しくらい違和感があっても気にせず前に進みなさい」と学生によく言います。自ら価値のあるものに会えるまで、ゆっくり時間をかければいいのです。その余白が必要なんですよ。私も為末さんに倣って、柔軟に軽やかに『遊』の要素を取り入れ、より良い人生の生き方を学生たちに説き続けていきます。

自然と共生する新たな国際目標の実現へ向け 『龍谷大学ネイチャーポジティブ宣言』を发出

自然資本を守り活かす社会へ

龍谷大学は、持続可能な社会の実現に向けた取組をおこない、その姿勢を社会に示してきました。その一環として、生物多様性保全が地球規模の社会課題の一つであることを認識するとともに、これに留まらず、社会、経済、技術などにおける横断的な社会変革の創出に向け、本学が取り組むべき課題の一つと位置付け、2024年3月に『龍谷大学ネイチャーポジティブ宣言』を发出しました。

「ネイチャーポジティブ(自然再興)」とは、自然生態系の損失を食い止め回復させていくことを意味する言葉です。環境破壊が進む現在、生物多様性保全のための行動が求められています。龍谷大学は長期計画「基本構想400」において自らを省みて他を利する「自省利他」の行動哲学を掲げ「仏教SDGs」を推

進し、様々な分野で生物多様性保全への取組をおこなってきています。

生物多様性は人間と自然環境が共存する上で必要不可欠な要素であり、食料や水、気候の安定など、私たちの生活に欠かせない多くの恩恵をもたらしていますが、人間の諸活動によって急速に失われつつあります。

国際的な枠組みとして、2022年12月に国連の「生物多様性条約第15回締約国会議(COP15)」において新たな世界目標「昆明・モントリオール生物多様性枠組」が採択され、2030年までに生物多様性の損失を止め、反転させ、回復の道筋に乗せる「ネイチャーポジティブ」の方向性が示されました。これに対応し、日本では2023年3月に新たな生物多様性国家戦略「生物多様性国家戦略2023-2030」が閣議決定され、取組が進められています。



龍谷大学においては先端理工学部や農学部、生物多様性科学研究センター等で、教育・研究・社会貢献の各分野で生物多様性に関する諸活動を展開しています。また、瀬田キャンパスには龍谷の森をはじめ周辺に豊かな里山が広がっています。深草キャンパスでは「深草を森にする」をコンセプトに各所に緑を配置した「森のキャンパス」へと施設整備を進めており、それぞれが「ネイチャーポジティブ」を体現するキャンパスとなっています。

これらの背景を踏まえ、『龍谷大学ネイチャーポジティブ宣言』を発出しました。本宣言を通じて「ネイチャーポジティブ」を先導する大学としての決意を広く社会へ向けて表明し、これを契機として「ネイチャーポジティブ」に資する取組の更なる充実・発展をめざしていきます。

また、2022年1月に発出している『龍谷大学カーボンニュートラル宣言』と合わせて、地球規模の環境問題を最重要課題の一つと捉え、これらを推進していく龍谷大学の姿勢は、龍谷大学だからこそその取組を具現化するものであり、その社会的訴求力に期待が高まります。

龍谷大学は、2039年までの将来ビジョンとして『「まごころ～Magokoro～」ある市民を育み、新たな知と価値の想像を図ることで、あらゆる「壁」や「違い」を乗り越え、世界の平和に寄与するプラットフォームとなる』ことを標榜しています。「ネイチャーポジティブ」に資する取組は、このビジョンの実現に向けた重要な施策と位置付けられます。



龍谷大学 ネイチャーポジティブ宣言



More
Ways

More
Possibilities



RYUKOKU
UNIVERSITY

社会を広く見つめ、新たな可能性を見出す。

リアルな現場で考え、理論と実践を往復しながら、
既存の枠にとらわれず、自ら課題に気づき、思考を深め、
より良い未来をともに創る人間を育成する。
龍谷大学社会学部は、誰一人取り残されない社会の実現へ、ともに歩んでいます。

龍谷大学 社会学部

変わりゆく社会に順応し新たに生まれ変わる社会学部 領域を融合した学びの世界へ

2025年4月、龍谷大学社会学部は、瀬田キャンパスから深草キャンパスに移転します。また、従来の3学科体制から「総合社会学科（仮称・設置構想中）」の1学科体制へと改編し、新たに特色ある4つの領域「現代社会」「文化・メディア」「健康・スポーツ社会」「現代福祉」を設置します。

現場主義を進化させたカリキュラム

「プロジェクト科目群」で自身のテーマを探求

学生は入学時に4つの領域から1つの領域を選択。1、2年次は学部共通の必修科目と各領域での学びを踏まえた上で、それぞれが研究したいテーマを設定します。

3年次からは領域の垣根を越えて「プロジェクト科目群」から、自分のテーマに合うプロジェクトを選びます。「プロジェクト科目群」は主体的な学びを深めることを目的にした教育課程。同一テーマで演習（ゼミ）と実習の少人数クラスをそれぞれ履修し、複合的な視点から研究と実習内容を深めます。学生はここで各自のテーマを徹底的に掘り下げ、4年次には卒業論文を執筆します。

講義×実習×演習を往還し

協働して問題解決できる力を身につける

「プロジェクト科目群」の特色のひとつは、理論を学ぶ「講義」と、社会問題の発見・解決などに取り組む「実習」と、実習で得た学びや成果を考察する「演習」を連動させて、

理論と実践を往還させるサイクルをつくっていることです。現場の実習を必修にして演習と関連付け、最終的に卒業研究に結びつける「プロジェクト科目群」を通した学び。これによって、広い視野をもってものごとを観察する力、社会の中に潜む問題を発見する力、多様な人々や組織と協働する力、問題を解決へと導く力などを養成します。

特色ある4つの領域

現代社会領域

差別や格差、ジェンダーギャップ、環境汚染など、現代社会における日本や世界のさまざまな社会問題を幅広く学び、その解決を模索する領域。

文化・メディア領域

芸術や文化、宗教と社会との関係、メディアやジャーナリズムと社会との関係を学び、人々のつながり方や価値観のつくられ方を研究する領域。

健康・スポーツ社会領域

生活に多彩な影響を与えるようになったスポーツやメンタルヘルスなど、私たちのからだところの健康から社会のあり方を学ぶ領域。

現代福祉領域

貧困をはじめとする福祉をめぐる社会問題と、その背景にある社会の構造を学び、誰もがその人らしく生き、安心して暮らすことができる社会の実現を実践的に目指す領域。



社会学部
特設サイト

社会学部の概要

学部名称	学科名称	学位	入学定員	編入学定員 <3年次>	収容定員
社会学部	総合社会学科 (仮称・設置構想中)	学士(社会学)	450人	10人	1,820人

※設置計画は予定であり、内容に変更が生じる場合があります。

More Collaboration

More Changes



自己を超え、連携を深め、変革を起こす。

常に当たり前を疑い、高い課題意識を持ち、
経営の力で社会を変革する人間を育成する。
人と人とのつながりを充実させるアプローチで、
世の中に新たな可能性を見出し、時代を切り拓いていきます。

経営学部が、経営学科と商学科(仮称)の2学科に「新たな価値を創造し提供する商学」を学ぶ

龍谷大学経営学部は2025年4月、新たに「商学科(仮称・設置構想中)」の開設を予定しています。これにより、経営学部は「経営学科」と「商学科(仮称)」の2学科制となります。

これまでの経営学部での実績を基盤に、実践と知識の往還型教育を主軸として、市場や地域社会において継続的に新たな価値を生み出すことのできるスタートアップ志向型の人間を育成できるよう、さらに教学内容を充実・発展させます。

商学科(仮称・設置構想中)の主な特徴

- ◎スタートアップ志向型の人間の育成
- ◎初年次から実践(実践型科目)と知識(講義型科目)の往還型教育の展開
- ◎チームティーチング体制による学修コミュニティの構築
- ◎実務家講師による科目の配置とオンライン教育の活用(海外の起業家による講義など)

経営学科の主な特徴

- ◎スケールアップ志向型の人間の育成
- ◎演習科目を中心とした少人数教育の徹底
- ◎課題発見・解決能力の修得を主眼に置いたカリキュラム構成
- ◎「演習」所属に必要な知識・技能にもとづいて講義科目を主体的・能動的に選択

経営学部
特設サイト



経営学部の概要

学部名称	学科名称	学位	入学定員	編入学定員 <3年次>	収容定員
経営学部 (入学定員: 540人)	経営学科	学士(経営学)	380人	3人	1,526人
	New商学科(仮称)	学士(経営学)	160人	2人	644人

※設置計画は予定であり、内容に変更が生じる場合があります。

New 商学科(仮称)コース(履修モデル)の特色

事業創造コース

事業の創造と運営についての実践や知識を学び、社会の諸課題を実証的に把握するとともに、ビジョンを掲げ、周囲の人間を巻き込み、必要な資源を調達し、新たな価値の創造と共有および地域・社会の発展に資する能力を身につける。

マーケティングコース

マーケティングや流通についての実践や知識を学び、社会の諸課題を実証的に把握するとともに、その解決につながる新たな価値の提供を通じて、顧客の創造と維持および地域・社会の発展に資する能力を身につける。

経営学科 コース(履修モデル)の特色

マネジメントコース

組織の運営・管理のために必須となる経営管理や人的資源管理、組織行動、経営組織などについて学ぶ。変化する現代の組織をマネジメントし、様々な現場でリーダーシップを発揮できる能力を身につける。

会計コース

職業会計人として、より高度な会計実務に適應できる能力、会計実務のさまざまな場面において生じる問題を的確に把握・分析する能力、それを解決するための判断能力、会計に関する専門的な知識と高潔な倫理観などを身につける。

経営情報コース

組織の情報を収集、処理、分析する方法を学び、企業活動の舞台となる市場(金融市場、労働市場など)や経営環境の変化に対応する戦略策定に必要な情報の活用方法を身につける。

社会課題の解決や新たな価値創造を牽引する拠点 「共創HUB京都(仮称)」を京都駅前に創設

龍谷大学と大阪ガス都市開発株式会社(代表事業者)、京都信用金庫の3者で構成する「共創HUB京都コンソーシアム(仮称)」は、京都市が公募した「京都市立芸術大学新キャンパス隣接地(将来活用地)の活用に係る公募」において、2023年9月に契約候補事業者に選定されました。

本事業は、京都駅前にイノベーションハブ拠点を整備する計画であり、大学・金融・不動産デベロッパーがタッグを組む、他に類を見ない画期的なプロジェクトです。2027年度中の事業運営開始をめざしており、3者が有するリソースやネットワークを駆使し、京都発の社会課題解決に繋がる産業創出やコミュ

ニティ形成、人材育成などを推進します。拠点内にはスタートアップ支援に特化した京都信用金庫の支店や、多様な学生や社会人などの交流を促す龍谷大学サテライトキャンパス、交流型の学生寮や賃貸マンションなど様々な機能を備える予定です。



「共創HUB京都(仮称)」の構築に向けて ソフトバンク、LINEヤフーと包括連携協定を締結

2023年12月、龍谷大学はソフトバンク株式会社(以下ソフトバンク)、LINEヤフー株式会社(以下LINEヤフー)と、社会課題解決や人材育成を推進する場として本学が整備を進める「共創HUB京都(仮称)」の構築や、本学のDX(デジタルトランスフォーメーション)に向け、包括連携協定を締結しました。

新拠点内におけるBeyond 5G(第5世代移動通信システム)などの最先端技術の実用化に向けた実験環境の整備や、AI(人工知能)やIoT(モノのインターネット)などのテクノロジーを活用した最新のソリューションや先端技術を体験できる施設の構築に向けて、ソフトバンクと検討を進めていきます。さらに、本学がこれまでも注力してきた学生ベンチャー

についても、ソフトバンクグループが持つスタートアップ支援に関する知見やノウハウの提供を受け、共創を支援する場となるよう連携を進めます。また、ソフトバンクが掲げる「スマートキャンパス構想」のもと、LINEヤフーとも連携。様々なデジタルソリューションを活用し、本学に適したDXの推進に取り組みます。



3大学連携によるプロジェクト ソーシャル・イノベーション人材養成プログラムを展開

2023年9月、龍谷大学・琉球大学・京都文教大学の3大学が、文部科学省令和5年度「人文・社会科学系ネットワーク型大学院構築事業」に共同で申請し、国内で唯一の私立大学が代表校を務めるプロジェクトとして採択されました。

龍谷大学大学院政策学研究科を中心に、琉球大学大学院地域共創研究科、京都文教大学大学院臨床心理学研究科が連携し、2025年度より「大学連携型ソーシャル・イノベーション人材養成プログラム」を開始する予定です。

このプログラムの特徴は大きく分けて二つ。一つは、大学院教育プログラムの開発です。3大学の各研究科が連携することにより、人文・社会科学系の多様な領域をカバーすることができ、ソーシャル・イノベーションに必要

な「社会課題の原因を多面的な視点から見抜く力」「多様な領域の知見を組み合わせる付加価値を生む力」を育むことができます。

もう一つは、資格認証制度の開発です。「地域公共人材」の資格認証プログラムの開発・運用をおこなっている一般財団法人地域公共人材開発機構(COLPU:コルプ)と連携し、その知見を活かしてソーシャル・イノベーション人材の認証制度を開発します。主な受講対象者はリスケリングニーズが高い社会人をターゲットとし、学部卒の大学院生にも積極的に受講を勧めていきます。

このプログラムを通じて、ソーシャル・イノベーション人材の社会認知を高め、他地域や他大学にもプログラムを開放し、様々な地域で広く展開されることで、イノベティブな発想を持つ人材が増えると考えます。

「環境DNA」分析の社会実装へ ネイチャーポジティブの実現に寄与するアプリケーション開発に着手

川釣りの許可証(遊漁券)の販売システムを手がける株式会社フィッシュパス(福井県坂井市)と本学先端理工学部山中裕樹准教授の研究チームが連携。コップ1杯の水で川に住む魚を特定する「環境DNA」分析の技術

を応用し、河川に存在する魚の種類とその分布の季節変化などを地図上に表示するアプリケーションを開発します。本事業は、経済産業省の2023年度Go-Tech事業に採択され、2025年までの実用化をめざします。



03

People, Unlimited

国際学部 グローバルスタディーズ学科 3年生
福井県立武生東高等学校 出身
米澤 亜美 さん

安心・快適・エコなキャンパスに 思いを形にしたウォーターサーバー

日々ペットボトルの水を購入するには費用がかさむ。マイボトル持参も一般的になってきたが、給水場所はそれほど普及していない日本。国際学部の米澤亜美さんと宮本敬志さんが2年生後期に留学したアメリカ、カナダの各大学ではウォーターサーバーが随所に設置され、マイボトルに常時給水できた。「日本は水道水の安全性が高く、飲用が気にならないという本学の留学生も多いようですが、海外では水道水飲用の不安もあってマイボトルでの給水が浸透していて便利でした」。すると、ウォーターサーバーの必要性を感じていた同学部の小内信乃さんからウォーターサーバー設置に向けて活動したいと打診され、二人は快諾。『みんなのお水プロジェクト』が始動した。

三人はまずウォーターサーバーのメーカーを調べ、学校への導入事例が多い企業にヒアリング。無償のテスト設置を提案されたことから、学内アンケートを実施。学生約200人中、7割以上が設置に賛成した。大学としてもプラスチックボトルゴミの減少を推進したいという意向があった。三人はこの高いニーズと、水の購入負担軽減、環境保全といった多角的な観点から大学側の担当部署にテスト設置をプレゼンテーション。プレゼンから約半年後、深草・大宮・瀬田の3キャンパ

スに計10台がテスト設置された。友人や大学がテスト設置をSNSや学内サイトで発信したこともあり、学生から教職員まで、行列ができる時もあるほど利用された。深草キャンパスではウォーターサーバーのそばにホワイトボードを取り付け、米澤さんが毎朝、メッセージを書いているのだが『水を買わずに済むので助かる』『冷水だけでなく常温、温水があるのがうれしい』との言葉を記す学生も多数。また、利用状況の分析のためにモニターを募集すると、三人で制作したロゴマークを入れたタンブラーの進呈もあり、瞬間に100人の定員に達したという。

テスト設置前に小内さんがアメリカ留学に旅立ったが「Zoomなどで頻繁に連絡を取り合い、遠くにいっても三人でプロジェクトを進めてきました。また、職員の方が積極的に相談にのってくださり心強かったです」と米澤さんは友人との絆や大学との協働に感謝する。

今後、正式な設置と無料給水には、経費の捻出方法の検討など課題もあるが「プロジェクトの進行にあたって学内設置を実現した他大学の学生にインタビューした時の『設置がゴールではない』との言葉に刺激を受けました。設置を継続し、ウェルビーイングな龍谷大学に繋げることが目標です」と米澤さんたちは、すでに先を見据え、動き出している。



ウォーターサーバーのモニターの方へオリジナルタンブラーを進呈する米澤亜美さん(右)と宮本敬志さん(左)

03 People, Unlimited

農学部 食品栄養学科 3年生
鳥取県立米子西高等学校 出身
中島 海斗 さん



高校生の身体と食事を科学的に解析 保護者も含め栄養サポート

龍谷大学農学部にて、学内外でアスリートに栄養サポートをおこなう「龍谷スポーツ栄養」という団体がある。主宰する食品栄養学科の中島海斗さんは、小学校から高校まで様々なスポーツに打ち込むなか、競技力を向上させるカギは「食」であることに気づき、スポーツ栄養学に関心を持つようになる。そして本学に入学後すぐに団体を発足した。現在は食品栄養学科の2~3年生10名と管理栄養士の助手の先生3名が所属し、これまでに大津市立日吉中学校バドミントン部、龍谷大学付属平安高等学校バスケットボール部、本学陸上部で活動している。「まだまだ未熟で、勉強中の僕たちの活動を受け入れてくださる各学校現場や周囲のサポートに感謝しています」と中島さん。

栄養サポートでは選手と選手の周りの人々に寄り添うことを心がけている。最初に活動した日吉中学では「成長期の中学生に正しい食習慣を身につけてほしい」と栄養素をクイズ形式で楽しく伝えた。また、子どもの成長に必要な栄養を知りたいという保護者の声に応じて食事作りに役立つパンフレットを制作して配布。すると、選手の身体の成長や体力の向上に加えて、朝食の習慣化や好き嫌いの克服といった成果が表れ、活動へのモチベーションが一段と向上したという。

2023年11月からは滋賀県立膳所高等学校野球部への栄養サポートを開始。定期的に、野球部の選手たちが瀬田キャンパスに来学し、高精度の体成分分析装置「InBody」を使って、筋肉量や水分量、体脂肪量などを測定。個別アドバイスと講習会を実施している。「選手たちからは身体を大きくしたいとの要望が多いので、筋力アップに不可欠なたんぱく質や炭水化物の一日に必要な摂取量の目安などを重点的にお伝えしています」

膳所高校野球部には戦術データ分析の専門部員が所属し、選手が数値を敏感に捉えられることを知った中島さんは『野球部のレギュラーと控え選手の身体比較』といった関連の論文を調べて紹介。選手間の競争と相乗効果に繋がるのではと野球部内での測定データの共有をおこなった。また、日吉中学での体験から野球部の監督に依頼し、保護者に向けたセミナーも開催。「本団体も保護者と一丸となり選手を支え、膳所高校野球部の甲子園出場をめざします」と意気込む中島さん。

「栄養サポートを通じて、選手たちが食事の重要性を理解し、自分には何が必要か考えて取り組んでくれることがとてもうれしいです。選手たちとともに学べるこの団体での経験を活かし、アスリートの皆さんの力となるよう夢に向かってチャレンジしていきます」



食と農の楽しさを伝えるWEBマガジン「Moglab」
<https://mog-lab.com/2024/02/post-300.html>



膳所高等学校野球部の選手にInBodyを使用して栄養サポートをおこなう中島さん



みんなの仏教SDGsウェブマガジン「ReTAction」
<https://retaction-ryukoku.com/2293>

文字や画像などを簡単に書き込み・読み込みできるICチップが内蔵された「レコード盤型の名刺」を手にする森さん

03 People, Unlimited

心理学部 心理学科 1年生
N高等学校 出身
森 彩花 さん



人と人を「隔てる壁」から人と人を「ツナグ」ものへ コロナ禍の亚克力ボードに新たな価値を

新型コロナウイルスの飛沫感染防止対策として設置された亚克力ボード。2023年5月の5類移行によって撤去が始まったが、社会的に再利用・再資源化は進まず、大量焼却による環境負荷が懸念されている。「もったいないうえに、私たちを感染から守ってくれていたのに、役目を終えれば即廃棄では都合が良すぎる。何とかしたい」という思いを抱いていた心理学部の森彩花さんを含めた初期メンバー5人が一致団結。本学で利用していた亚克力ボードをアップサイクルする『#ツナガル亚克力プロジェクト』を立ち上げた。

コンセプトは『人と人を隔てる壁から、ツナグものへ』。コロナ禍の期間、人との繋がりやコミュニケーションを妨げていた亚克力ボードに今度は繋がりを深めるという、全く逆の役割を果たしてほしいとの思いを込めた。

最初におこなったのは「メッセージボード」としての活用。深草キャンパスのコミュニティスペースに設置したところ、多くの書き込み利用があり、手応えを感じたという。

「さらに亚克力素材として加工すれば、面白いプロダクトができるのではと考えていたところ、先端理工学部をはじめ心理学部、文学部、経済学部などの学生と、まさに『ツナガル』ことができ、プロジェクトが加速しました」

と森さん。先端理工学部の本プロジェクト参加学生は、STEAM commons (3Dプリンターなどの工作・加工機器を設置)で、ものづくりに取り組む機会が多く、亚克力ボードの加工はお手のもの。そこに森さんやプロジェクトメンバーの新しいアイデアがプラスされ『ツナガル』を形にしたものが完成した。それは、NFCタグ(ICチップ)を内蔵した小さな「レコード盤型の名刺」だ。「スマホをかざしてもらおうとスマホに情報が表示されます。肩書きだけでなく、SNSの情報や画像などを簡単に書き込み・読み込みができる新しいコミュニケーションツールなんです」と森さんは目を輝かせる。

森さんたちは学外での活動も開始。深草キャンパス周辺の飲食店を訪問して亚克力ボードの処分困っていないかヒアリングをし、要望に応じたアイテムに加工。また、近隣のイベントでは、子どもが亚克力ボードに手形を押して作品にするワークショップを開催し、喜ばれたようだ。

「プロジェクトの名前どおり、たくさんの人と繋がり、活動を理解していただけることがやりがいになっています。これからは自治体や企業との連携も視野に入れ、亚克力ボードの様々な課題の解決に向けて、貢献していくことが目標です」

04 Education, Unlimited

経営学部
國重裕 教授

現地の人とともに考える ラオスで知った国際協力の在り方

ゼミ生自ら、ラオス研修をプランニング

龍谷大学には、経済学部・経営学部・法学部・政策学部の学生を対象とした「学部共通コース」がある。学部の枠組みを越えた教育プログラムを展開する、学際的で画期的なコースだ。4つの専門領域に分かれ、うち国際関係コースは、海外留学とグローバルな活躍、国際協力を視野に、世界の国・地域・人について学修する。経営学部の國重裕教授は、国際関係コースで、国際協力に関するゼミを主宰している。その國重ゼミに所属する7人が9月2日～8日、ラオス人民民主共和国(以下ラオス)で研修をおこなった。

ラオスが研修先に選ばれたのには、何度もこの国を訪れ、伝統工芸品であるシルク織物の装いで教壇に立つ國重教授の影響も大きい。「ウィーン大学留学時、隣国ユーゴスラヴィアは内戦中でした。西側諸国が民主主義や人権を盾に、自らの価値観でバルカン半島を批判する態度に疑問を感じました。その後、世界を旅する中でその思いを強くしました。その国の歴史や文化の強みを活かした『近代化』はないのか。そのなかで出会ったのがラオスです。ラオスの国民性は穏やかでのんびり

しています。コーヒーの栽培が盛んで、とくにシルク織物の美しさに心を奪われました」

ただ、ラオスは他のASEAN諸国と比較すると日本での認知度は低い。50近くの多民族国家ながら人口が少なく、国土の大半が山岳地帯のためインフラや教育が行き届かないなど国家の成長に不利な条件が重なり、国連による後発開発途上国に位置づけられている。

國重教授は、「国際協力」をゼミの学修テーマに掲げ、児童労働や途上国の教育問題、あるいはグローバル企業が地域にもたらす負の影響について考えてきた。ゼミ生たちは、「生産国の実情をこの目で確かめて、何か力になりたい」と研修を熱望。渡航先にラオスを選び、費用の算出から飛行機・宿泊先の手配、研修の実施計画まで、全てゼミ生たちでおこなった。

「ゼミのモットーは現場主義。現場で実態を見て、人々の話を聞き、五感で感じ、課題をどのように解決すればよいのか、リアルに考えることが重要だからです。そんな思いのなか、ゼミ生が自主的な行動に移してくれたことをうれしく思います」と目を細める國重教授。出発後も学びのプランニングはゼミ生たちに委ねたようだ。



1 貧困をなくそう

4 質の高い教育をみんなに

5 ジェンダー平等を実現しよう

6 安全な水とトイレを世界中に

8 働きがいも経済成長も

12 つくる責任つかう責任

Feature Article

People, Unlimited

Education, Unlimited

Research, Unlimited

Connect, Unlimited

News & Topics

ラオスのホアイホン職業訓練センターで体験学習をする国重ゼミの学生たち



ラオスシルクの海外販売への課題、女性の経済的自立についてディベートをする國重ゼミの学生たち

「国際支援」ではなく「国際協力」が重要

研修では、まず首都ビエンチャンにあるホアイホン職業訓練センターを訪問。

「ラオスシルクは民族ごとに柄があり、技術は母から娘へと、受け継がれていきます。ただ、民族ごとに言語が異なり、なかでも文字が存在しない民族は口承で受け継いでいくしかありません。公用語として使われているラオス語も通信メディアが不十分なので、未だ整備されておらず、技術の継承も難しく、安価な製品が中国やベトナムから流入する今日、ラオスのシルク織物産業が途絶える可能性があります。このホアイホン職業訓練センターは、技術の保護と継承、シルク織物を職業とする

ことで、貧困に苦しむ民族の女性の経済的自立をめざしています。設立者のチャンタソン・インタヴォン氏は日本在住で、私は以前から交流があります。現在、NPO法人を運営し、ラオスと行き来しながら、子どもの教育にも尽力されています」

ゼミ生たちは、2日間にわたってシルク糸の手染め、機織り機での手織りを体験学習。1日でわずか数センチしかできない緻密さと労力に驚き、完成品の質の高さに改めて感動。世界市場でも支持されるのではと考えた。ところが、ラオスは社会主義国家ゆえに、ある程度の賃金と生活が保障されているため、人々の労働意欲は高いとはいえず、物流の不備、法律が官僚的と、壁が立ちはだかる。ゼミ生たち



は考えの甘さを痛感。「国際協力を学んでいるのに、力になれない」と意気消沈したという。

「先進国の価値に基づいた、短絡的・短期的な支援では途上国の課題解決は不可能です。途上国の発展には、その国のリソースを活かす方法をそこに生きる人とともに考え続けることが重要です。失敗しないで社会に出ることが一番の失敗。ゼミ生たちには今のうちにどんどん失敗してほしい。身をもって体験したラオスの実情と、現地で触れ合った人々の笑顔を新たな力にすれば、自分たちにもできることが必ず見つかる。自ら掲げた国際協力の答えを求め、途上国の教育や女性の地位向上に向け一歩ずつ前に進んでほしい」と國重教授。



國重裕

京都生まれ。京都大学文学部、同大学院ドイツ文学ドイツ語学科卒業。2003年「表象のユーゴスラヴィア—ユーゴスラヴィア内戦と西欧知識人」で博士号取得(文学)。2005年より龍谷大学教養教育ドイツ語担当教員。専門は、現代オーストリア・東欧文学、比較文化論。

新時代の高校と連携 学生と協働する「社会協創ネイティブ」を育成

同じビジョンを持つ新たな高校と連携

龍谷大学では、高校から大学への円滑な接続を図る「高大連携推進室(以下推進室)」を設置しており、龍谷大学附属平安高等学校をはじめ、多くの公立・私立高校と連携し、教育プログラムの提供、イベントの開催をおこなっている。こうした機関は、他大学にも自学への進学促進のために設置されているが、本学の推進室の目的は一線を画す。

「龍谷大学の『高大連携』は、高校生から大学生への成長プロセスに積極的に関わり、社会や地域に貢献できる人材を高大で育成していく『社会協創』を掲げていることが特色です。また、大学とは、現在、高校で進められている探究的な学びを深化させる場所であり、自主性や課題発見・解決といった社会人基礎力を磨く機関であることを示すことで、高校の授業や進路指導を補完することができます。高校生には『大学の学問・研究って楽しそう。学んでみたい』と思ってもらうことが目的です。これらは本学の行動哲学『自省利他』や『仏教SDGs』の考え方に基づくものです」と語るのは、推進室長を務める農学部の山崎英恵教授だ。推進室の姿勢については、本学教員も

支持。「高校生を招いての教育プログラムでは、どの学部の先生方も興味を惹きつける講座を企画・実施されています」と、山崎室長。このような活動から、本学への進学を決める高校生が多いという実績にも繋がっている。

京都市教育委員会とは包括連携協定を締結。2023年11月15日には、同委員会が進める市立高校の改革の一環として、京都市立開建高等学校と連携協定を結んだ。開建高校は、文部科学省が実施する「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革推進事業)」の指定第一号校として2023年4月、深草キャンパス近隣の京都市南区に開校。

「やってみたいをやってみる」をモットーに、生徒の自主性を重んじ、京都をフィールドにした探究型プログラムを展開。社会協創できる人材の育成をめざしている。

「開建高校のビジョンやプログラムは本学との親和性が強く『龍谷大学は開建高校生の次の学びの場、将来の目標を示してもらえ』と、教育委員会と開建高校からは非連携をと、依頼いただきました」。開建高校の生徒はもちろん「新時代の高校生」に応じた、新たな学びを本学が構築していく第一歩になることも連携協定の理由だという。



高大連携教育プログラムで高校生とおせち料理の調理実習をする山崎教授



高大連携教育プログラムで古本強農学部教授から植物細胞の講義を受ける高校生たち

龍大生と開建生は将来の社会協創の仲間

協定締結から1カ月後の12月21日と22日に、瀬田キャンパスで高大連携教育プログラムがおこなわれ、開建高校の生徒243人が来学。先端理工学部6講座、農学部3講座、社会学部1講座から興味のある講座を受講した。山崎室長は農学部の学生と同様の調理実習を開講。受講に向けての予習、調理後の復習も課した。他も普段の学修・研究内容とほぼ同様。生徒たちがテーマを考察したり、観察・実験での気づきを発表したり、講座も通常スタイルで進められた。「高校生向けに用意した一時的な講座では、大学はどんなところな

のか、何を学ぶべきか、掴めません。大学の学修・研究を体験すれば、実際の学びがリアルに理解でき、自分に適した分野の発見、進学してもっと学んでみたいという意欲喚起、正しい進路選択に繋がります」と山崎室長。大学は興味・関心や専門性を究めるだけでなく、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」という社会人基礎力を身につける機関でもあり、講義や実習、研究によってそれらが養われていくことも高校生に伝えていくという。

開建高校とのプログラムでは本学の学生も指導やサポートにあたった。学生は高校生と年齢が近く、身近な先輩の存在。そんな先輩の学ぶ姿、知識に直に触れることで、学生



が高校生のロールモデルになると山崎室長。「学生も新時代を担う人材であり、高校生は、将来、社会協創の仲間となる可能性が大いにあります。また、私が日々感じているのは、若い世代は『社会協創』という言葉や目的に対して、構えることなく自然に捉え、自分ができること、やりたいことを柔軟に考えて行動します。『社会協創ネイティブ』とでもいっていいのでしょうか。新しいイノベーションは次世代が融合して創出されます。プログラムを通じて、本学の学生も開建高校生の新たな価値に出会い、学び、それぞれの知見を活かしながら、社会協創と社会貢献を実現してほしいと思います」と、連携協定のその先を見据えた。



山崎 英恵

専門分野は食品科学、栄養化学。京都大学大学院農学研究科食品工学専攻博士課程修了。日本学術振興会特別研究員、Yale大学医学部博士研究員、京都大学（連合）農学研究科（研究院）研究員を経て、2015年龍谷大学農学部准教授に就任。2020年同学部教授。2021年より高大連携推進室長。

05

Research, Unlimited

政策学部
阿部 大輔 教授

観光産業と市民生活を両立するために オーバーツーリズムの本質を考える

オーバーツーリズムが街の構造を変える

観光客の増加により住民の暮らしに悪影響をおよぼす「オーバーツーリズム(観光公害)」が世界の観光地で再燃している。龍谷大学のある京都市でも同じように、インバウンド(訪日旅行者)需要が回復した2023年頃から、公共交通機関の混雑、不動産価格の高騰による住宅問題など、オーバーツーリズムの影響が増々深刻化してきている。

「オーバーツーリズムで最も深刻な問題は、観光の論理で街が大きく変化してしまうこと」と指摘するのは政策学部の阿部大輔教授だ。都市計画が専門で、観光都市の再生に詳しくバルセロナや京都の「田の字地区」など歴史ある古い街を研究対象にしている。

バルセロナは1992年のオリンピックを機に都市再生が進み、結果的に観光の魅力が増大した。その後も継続的に観光用宿泊施設が増え、賃貸価格が高騰。ジェントリフィケーション(都市の富裕化現象)で住民が追い出されてしまい、旧市街地は「住む場所から泊まる場所」へと変化していった。2014年、旧市街地で「観光客は帰れ」「ホテルはもうたくさんだ」と訴える住民の抗議デモに、調査で訪れていた阿部教授は遭遇する。「観光は必

ずしも街にメリットをもたらすばかりではない」と痛感し、2015年頃からオーバーツーリズムの研究に本格的に着手した。

バルセロナが抱える問題は京都でも起きている。なかでも公共交通機関の混雑は住民側も観光客からも改善を求められる課題だ。人気の観光地への移動ルートは限られていて、市バスに観光客が集中し、溢れた住民が乗車できないことが問題になっている。

「混雑を一定程度回避するには、観光客を分散させる対策が必要です。ただ、より深刻なのは宿泊施設が無秩序に増加し続けること。土地利用規制など何かしらの都市計画措置が必要です」と阿部教授。

一方、訪れる側の観光体験の質にも悪影響が出ている。どこへ行っても混雑しては「期待していた街ではなかった」という印象を持たれ、京都の魅力もマイナスになる。

「京都もバルセロナと同じように、受け入れ可能な容量が限界に近づいています。街の広さ、人口、交通などインフラの充実度をもとにキャリング・キャパシティ(その街が受け入れられる観光客の数)を算出し、観光客を増やすことだけを目標とせず、住民の生活を守りながらの観光政策の議論を進めることが大切です」と阿部教授は提言する。



11 住み続けられるまちづくりを



Feature Article

People, Unlimited

Education, Unlimited

Research, Unlimited

Connect, Unlimited

News & Topics

※ 京都市内の中心部、中京区と下京区にまたがる商業地区や観光地を擁する約2平方キロメートルの地区を示す俗称



観光は魅力ある都市があってこそその産業

「もともと京都は製造業を中心に成り立ってきた街であり、観光を主軸に発展してきた街ではありません。街が税金で整備してきた公共施設やインフラを、負担なく利用する観光客からも別の方法で負担してもらう必要があるのではと考えています」と阿部教授。

観光客の増加を見込み「田の字地区」に宿泊施設が集積しはじめ地価が高騰。子育て世代の若年層が中心部に住居が持たなくなり市外へ流出したり、オフィスの家賃の上昇により起業するチャンスが失われたりするなど大きな問題となっている。観光客は中心

地にホテルが建てば利便性が良いから喜ぶが、住民からすれば、観光客は町内費を負担するわけでもなく、街を守ってはくれない。混雑を受け入れるだけでは住民は納得しない。

阿部教授は「私は観光に反対しているわけではありません。地域に利益が返ってくるサイクルが必要だと考えています。観光産業で得た利益を可視化し、地域に還元するという仕組みです。現状で京都市は、宿泊税の利益の一部を公衆トイレの整備に充てていますが、例えば町屋の修復費用や路地の保全費用に充てるなど、京都の良さを支えてきた資源に見える形で還元できれば、住民も観光のメリットを実感できるのだと思います」と語る。



都市計画で使う言葉の一つに「公共の福祉の増進」というものがある。一人の利益のために何人もの人が不利益を被ることがあれば、その私権を制限できるというもの。その視点から、観光に携わる事業者だけが利益を得るのではなく、そうでない人にも利益を分配できる方向性を探る局面にきている。

「住民自らが、伝統ある街並みや昔から根付く生活文化を守り続け、その京都文化に魅力を感じた観光客が対価を払う。このサイクルができれば、ともに快適に過ごせる観光都市になるのではないのでしょうか。サステナブルな先進観光都市をめざした都市計画のあり方をこれからも研究していきます」



阿部 大輔

早稲田大学理工学部土木工学科卒業。東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程修了。カタルーニャ工科大学バルセロナ建築高等研究院博士課程に留学(スペイン政府給費奨学生)。博士(工学)。

政策研究大学院大学研究助手、東京大学都市持続再生研究センター(建築学専攻)特任助教、2011年龍谷大学政策学部准教授等を経て、2018年同学部教授に就任。専門は都市計画・都市デザイン。

ステマをはじめ不正なデジタル広告に 法の手で包囲網を

ステマ規制の第一歩も道は険しい

2023年10月『ステルスマーケティング(以下ステマ)』は景品表示法違反として規制された。ステマとは、広告であることを隠して商品やサービスを宣伝する手法のことである。

「ステマは消費者の意思決定に不適切に作用し、公平な企業間競争も歪める悪質な手法です」と話すのは、日本と欧米の消費者保護や広告規制などを比較研究する法学部のカライスコス アントニオス教授だ。消費者庁による有識者検討会の一員として今回の規制整備の考察にも携わった。

「OECD(経済協力開発機構)の主要な先進国のうち、日本だけがステマの規制がなく、取り残されていました。今回の規制は大きな進展ですが、早急な対策を優先するために、時間を要す新法立案ではなく、嘘や大げさな表示を規制する景品表示法の不当表示の対象にステマが追加される形となりました。この不当表示で罰せられるのは事業者のみ。インフルエンサーなど第三者は法的制裁を課せられません。また、事業者が広告を依頼した場合も、インフルエンサーの自主的な投稿であれば罰せられないことが課題です」

一方、欧州連合(以下EU)は、2005年に「不公正取引方法指令」を採択。事業者の消費者に対する不公正な取引方法を禁止。インフルエンサーも規制対象となっている。

「日本もEU並みの包括的で強い実効力のある法整備が急務です。というのは、AI(人工知能)をはじめ広告・マーケティングのデジタル技術の進化が凄まじく、後追い型の立法では対応しきれないからです」

AIを駆使したデジタル広告として知られるのは、消費者の閲覧履歴等を分析して広告を表示する『ターゲット広告』。広告には該当しないが、事業者により有利な選択肢に誘導し、意思と異なる決定をしてしまう『ダークパターン』。同一商品を個別に価格設定する『パーソナライズド・プライシング』など、AIが個人データを「燃料」に消費者をターゲットにし続ける。

「手元にあるスマートフォンが日常会話をデータ分析し、広告を提示しているといった取引方法も認識されています。EUは個人データだけでなく、AIについても規制があり、高度化・巧妙化するデジタル広告に対する包囲網を張っています。日本も法律によって消費者を厳格に保護しなければなりません」とカライスコス教授は提言する。

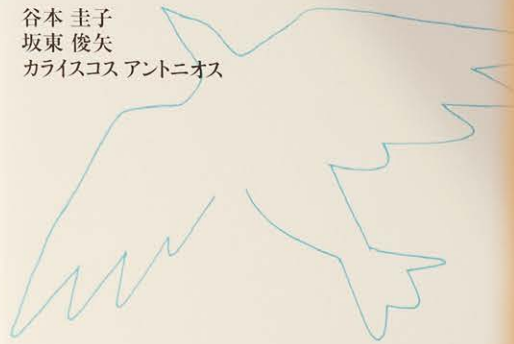


Consumer Law: Present and Future

これからの 消費者法 [第2版]

社会と未来をつなぐ消費者教育

谷本 圭子
坂東 俊矢
カライスコス アントニオス



法律文化社



全ての人に公平でやさしい広告を

カライスコス教授は、近年、AIと消費者の在り方について追究。消費者のウェルフェア（良い状態）をめざしている。この消費者のウェルフェアは、マレーシアの非営利団体「ペナン消費者協会」が消費者の権利として提唱。カライスコス教授は協会の考えに共鳴し、現地を訪問して議論を重ね、研究・教育に活かしている。そのなかで、とくに注視しているのが、動画サイトなどの視聴途中で提示される広告だ。これは『アテンション・エコノミー』という、人々の注目を集めることで利益や価値を生み出す経済学概念に基づくもの。視聴

者は興味のない広告を強制的に閲覧しなければならず、不快に思う人が少なくない。

「人間にとって大切なものの一つが時間です。時間は誰しものが平等に与えられた貴重な資源。短くても強制的な広告閲覧によって時間を奪われることは、侵害行為であり、感情にも影響を及ぼします。この時間と感情への配慮は消費者の権利保護に重要です」

利益だけを求めるあまり消費者に敬遠される広告ではなく、法を遵守し消費者を重んじた広告は、好感や信頼を獲得し、利益に繋がる可能性が高い。一方、消費者は、広告の商品やサービスに対して、口コミだけに頼るのではなく、自ら見極めていくことも大切だと



カライスコス教授は言う。

「法の世界は、原告・被告の双方の主張を多角的に分析し、公平に判断しますが、これはデジタル広告にも通じます。社会や物事を公平かつ俯瞰で捉えることができる事業者と消費者、それに見合ったデジタル広告こそが、健全で好循環をもたらす市場経済を生み出していくと私は思います」

意思や感情を持たないAIがデジタル広告に台頭し、消費者を脅かしているからこそ、カライスコス教授は「人が考える、人を思いやる」ことを大切に、欧米よりも進化し、世界の規範となるような日本の法整備とウェルフェアな環境の創出のためにアプローチを続ける。



カライスコス アントニオス

アテネ大学法学部卒業、同大学院法学研究科修士課程修了。修士課程在学中にギリシャ共和国司法試験合格、弁護士として実務に携わる。その後、文部科学省の国費留学生として日本に留学、早稲田大学で博士号(法学)取得。マラヤ大学(マレーシア)法学部客員教授、タマサート大学(タイ)法学部客員准教授、スオール・オルソラ・ベニカーサ大学(イタリア)法学部客員准教授を経て、2023年龍谷大学法学部教授就任。日本消費者法学会理事。

06 Event Ryukoku Museum

壁画から見える交差する信仰の世界 太陽神と弥勒の謎めく関係性に迫る

春季特別展

『文明の十字路・バーミヤン大仏の
太陽神と弥勒信仰ーガンダーラから日本へー』

2024年4月20日(土)～6月16日(日)

休館日:月曜日(4月29日(月)、5月6日(月)は開館)、
4月30日(火)、5月7日(火)

主催:龍谷大学 龍谷ミュージアム、京都新聞、読売新聞社

6世紀頃から交易路の要衝となり、ユーラシア各地の文化が行き交い、文明の十字路となっていたバーミヤン遺跡(アフガニスタン)。渓谷の崖面には多くの石窟や東西に巨大な2体の大仏が彫られ、それぞれの大仏の頭上には「ゾロアスター教の太陽神ミスラ」と「弥勒菩薩が住まう兜率天(とそつてん)」の壁画が描かれていた。2001年、イスラム原理主義組織タリバンによって大仏は破壊されたが、バーミヤン遺跡研究の世界的第一人者である宮治昭氏の監修のもと、これまでに日本の調査隊が撮影した写真や調査資料から詳細に検討を重ね、2023年に壁画の新しい描き起こし図が完成した。その描き起こし図が、この度の春季特別展『文明の十字路・バーミヤン大仏の太陽神と弥勒信仰』で初めて披露される。宮治氏は、龍谷ミュージアム初代館長でもあり、本展の監修も担う。また、描き起こし図を描いたのは正垣雅子氏(京都市立芸術大学准教授)で、本図は世界的にも貴重な学術資料として未来に託される。

第1、2章では『描き起こし図』と唐の仏教僧・玄奘の旅行記『大唐西域記』から当時のバーミヤン遺跡の姿を紹介する。「なぜ、両大仏の頭上に、異教の太陽神や兜率天での弥勒菩薩の世界が描かれたのか」バーミヤンにおける弥勒信仰の背景に迫る。

第3、4章では、アジアに広がる弥勒信仰の奥深さを、国宝や重要文化財を含む多くの仏教美術とともに紹介する。釈迦の後を継ぎ、遠い将来この世に現れる「ほとけ」とされた弥勒への信仰は、2～3世紀頃すでにガンダーラ地域で非常に盛んだった。そして中央アジアで発展、東アジアから日本へと伝わる。

「中央アジアの坐像の弥勒は、左手に水瓶を持ち足首を交差した姿ですが、日本では半跏思惟像(片足を反対の太腿の上に組んで座り、指を頬に当てて物思いにふける)が多い。そんな弥勒像の変遷もこの展覧会の見どころです」と岩井俊平学芸員は解説する。



岩井 俊平 龍谷ミュージアム学芸員



龍谷ミュージアム
Webサイト



弥勒菩薩交脚像 片岩 2~3世紀 平山郁夫シルクロード美術館

07

Connect, Unlimited 龍谷大学をつなぐ対談

株式会社革靴をはいた猫 龍谷大学大学院政策学研究所
代表取締役社長 研究科長
魚見 航大 × 中森 孝文

多様な人、知恵との融合で創出をめざす 新しいソーシャル・イノベーション

龍谷大学大学院政策学研究所は、琉球大学、京都文教大学と連携して、文部科学省に採択された事業『大学連携型ソーシャル・イノベーション人材養成プログラム』を2025年から展開予定。深刻化する社会課題の画期的な解決策を見出す人材を育成する。これに先駆けて、政策学研究所長の中森孝文教授と政策学部在学中にインクルーシブ（誰も排除しない）な社会をめざす靴磨き・靴修理店『革靴をはいた猫』を起業した魚見航大さんが、ソーシャル・イノベーションについて語り合った。

中森: 私は魚見さんが4年生の時に障がいのある人の就労支援と雇用創出のために靴磨

きの事業を開始し、応援文を書いてもらいたいと依頼されて見学に訪れ、そこでソーシャル・イノベーションを実現するための新しい価値に遭遇しました。

魚見: その時はまだ店舗を構えておらず「Café樹林」で活動し、先生方やカフェに来店されるお客様の靴を磨いていました。

中森: 現在も魚見さんのお店に勤務されている藤井さん（たくちゃん）に初めてお会いし、脇目も振らず靴を磨き続けておられたので「どこまで磨くの?」と声をかけると、返ってきた答えはたった一言「ピカピカ」。私は心の底から感動しました。付加価値には性能などの「機能的価値」と持つ喜びなどの「意味的価値」がありますが、ソーシャル・イノベーションで創出をめざす価値として「意味的価値」の大切さを「ピカピカ」というお返事から気づかせ

中森 孝文

専門分野は経営学、知的資産経営。京都大学修士（法学）、神戸大学博士（経営学）。京都工芸繊維大学地域共同研究センター准教授、立命館大学経営学部准教授、2011年龍谷大学政策学部教授に就任。

4

質の高い教育を
みんなに

8

働きがちな
経済成長も

11

住み続けられる
まちづくりを

12

つくる責任
つかう責任

ていただきました。たくちゃんが時間を忘れて周りも見えなくなるほど集中することは、経済的合理性という視点から見たら時間をかけすぎるといふ弱みと見えてしまうかもしれませんが、しかし、靴磨きでは決して手を抜かず、徹底的に磨き上げるという強みとなり、他にはない価値を提供できます。それは精度などの機能はもちろんですが、加えてお客様に感動や喜びを与えます。経営者はそれに見合った価格を設定することで事業性を担保しながら、障がい者の賃金をいかに上げるかといった背景にある課題解決を果たせます。

魚見:先日、靴磨きの技術を競う大会に出場した藤井は「誰よりも丁寧に靴を取り扱い、丹精込めて磨いている」と審査員の方々に評価され、特別賞に輝きました。私も含め、他の出場者は誰よりも速く、キレイに磨いて勝つことばかりにとらわれていたようです。

中森:一秒でも速く、一円でも多くという「経済的合理性」の追求で創出されるのは「機能的価値」です。これにより科学技術が進化し、社会は便利で、快適になりました。科学技術の進化もイノベーションですが、環境問題や経済格差などの問題も引き起こしました。これからは「社会的合理性」を追求し「意味的価値」を創出・還元していくことで、課題を解決し、社会を変革することが求められます。

魚見:「ソーシャル・イノベーション」ですね。

※「Café樹林」:ノーマライゼーションの理念(多様な人が補い、活かし合って暮らす社会こそノーマルな社会であるという考え方)を実践するために2006年深草キャンパスに開設。障がいのある方と学生がともに働くカフェ。

魚見 航大

2017年龍谷大学政策学部卒業。「Café樹林」との出会いを契機にあらゆる若者が自立できる仕事をつくらうと卒業前に(株)革靴をはいた猫を起業。靴のメンテナンスを通して課題に向き合う。



魚見: 起業当時と比べると、ソーシャル・イノベーションが社会の共通言語となり、中森先生が言われた「社会的合理性」「意味的価値」を追求する企業や人が増えています。

中森: 確かに機運が一段と高まっています。

魚見: それによって繋がりが生まれ、事業が広がりました。その一つが『手放す貢献プロジェクト』です。靴磨き職人の養成には練習用の靴が必要です。調達方法に悩んでいると、お客様が不要になった靴を寄付してくださいました。それで、支援してくださる多くの皆さまのご協力のもと、靴の寄付回収を実施すると、短期間で1,000足近くが集まりました。寄付された靴を磨いて修理・販売する取組に、高級紳士靴ブランド「三陽山長」が関心を持ってくださり『山猫Project』という再生販売とメンテナンス事業を協働で開始しました。事業の拡大はもちろんですが、靴磨きのプロ集団として認めてくださったことがうれしいです。

中森: 感動を伴う「意味的価値」を提供してきた成果ですね。ソーシャル・ビジネスに限らず、成長と持続は企業の使命。それには強みを活かしながら、新たな事業展開が必要です。

魚見: 人と人の繋がりが大切ですね。

中森: その通りです。ソーシャル・イノベーションは、様々な知恵の融合によって生まれます。

魚見: 靴の寄付回収も再生販売も私だけでは発想できませんでした。事業展開だけでなく、経営というのは難しいですね。

中森: ソーシャル・イノベーションの事業性を維持するには、スタッフの育成や意欲向上、収益をはじめとする資金管理も重要でしょう。

魚見: 私はそういったノウハウを起業時に持っていませんでした。なので、2025年から始まる『大学連携型ソーシャル・イノベーション』



『革靴をはいた猫』の店内で靴を丁寧に磨く様子

人材養成プログラム』は事業の創造や維持、発展といったビジネス的な要素についても学べると思うので、羨ましく、興味もあります。

中森: ソーシャル・イノベーションに不可欠な多くの知見を獲得し、社会課題の解決に挑戦していきたいと考える多様な人々との繋がりを構築できるよう、現在プログラムの内容を熟考し、準備を進めています。社会課題から付加価値を創造するソーシャル・イノベーターになるにはどうすればいいと思いますか。

魚見: 在学中は、ソーシャル・ビジネスに関わることも、起業も考えていませんでした。地域や企業と連携したプロジェクトに取り組む政策学部の実践型授業によって身についた、課題を見つけて解決策を考え行動する力が今に結びつきました。今後のソーシャル・イノベーションとしては、環境問題をはじめ地球規模で課題を捉え、長期的なスパンで解決策を考えていくことが必要ではないでしょうか。

中森: 魚見さんが障がいのある人々に対して、多面的な視点から、その人の潜在的な能力や可能性を引き出したように、ソーシャル・イノベーションの新たな価値創出には、固定観念にとらわれないことも大切です。

魚見: ありがとうございます。事業をしていると固定観念にとらわれてしまいがちです。今後も政策学部での学びと経験、今回の中森先生のお話を活かし、事業に取り組んでいきます。

中森: ソーシャル・イノベーションの究極の目標は、本学の行動哲学「自省利他」に通じる「社会のため」です。これから始まる『大学連携型ソーシャル・イノベーション人材養成プログラム』で社会のために力を尽くすことができる人材を輩出していきます。期待してください。

大学連携型ソーシャル・イノベーション
人材養成プログラム (ホームページ)





My Campus

08 My Campus マイキャンパス

タイトル「夕暮れ」

Iさん 2023年11月撮影(大宮キャンパス)

「My Campus」ページでは、時代の流れとともに変わりゆく龍谷大学の「今」を感じていただけるキャンパス風景写真を、読者の皆さまから募り紹介しています。キャンパスの素敵な瞬間を是非写真に収めてご応募ください。

応募写真の中から厳選の上、次号の本ページを飾らせていただきます。

応募締切

2024年6月28日(金)

募集内容

龍谷大学のキャンパスを撮影した写真
(本学と関連のある場所・施設等)

応募方法

以下のフォームからご応募ください。

<https://www.ryukoku.ac.jp/about/mycampus/>



注意事項

- ・2024年3月以降に本人が撮影した写真に限ります。
- ・1点につき10MB以内のjpgファイル。
- ・誌面の都合上、掲載は横サイズのトリミングとなります。撮影の際にはご注意ください。
- ・組写真、合成写真、過度の画像補正など実像に反する写真は不可。
- ・著作権・肖像権の侵害には十分に注意してください。
- ・応募に係る個人情報は本事業以外には利用しません。
- ・応募写真につきましては、龍谷大学が広報活動のために自由に利用できる権利を許諾していただきます。

応募写真は以下から閲覧していただけます。

龍谷大学の「今」を是非ご覧ください。

<https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/mycampus/>



最新情報



本学初eスポーツのプロプレイヤー前野拓光選手 2022シーズンMVP受賞、2023シーズンチーム キャプテンとして連覇を達成するなど躍進中

文学部3年の前野拓光選手(プレイヤー名:マエサン、福岡ソフトバンクホークス所属)はプロ野球eスポーツリーグ「eBASEBALLプロスピAリーグ」でプロプレイヤーとして活躍。天性のバッティングセンスを持ち、2022年に所属チームを初の日本一にした立役者としてMVPを受賞。2023年はキャプテンとしてチームを牽引し、日本一連覇を果たす。約70万人が参加した個人の全国大会「プロスピAチャンピオンシップ」(2023年)では準優勝を獲得するなど注目を集める。



瀬田キャンパスに24時間営業の 無人決済コンビニが開店 食環境の充実で学生たちの研究活動を支援

2023年8月、龍谷大学は西日本の大学で初となる、株式会社ファミリーマート(東京都港区)の24時間営業の無人決済店舗を瀬田キャンパス7号館1階エントランスに開店した。天井AIカメラと棚に設置されたセンサーで商品を認識、タッチパネルのレジで決済方法を選ぶだけで会計が完了する。先端理工学部、社会学部、農学部の学生・大学院生約6,700人が在籍する瀬田キャンパスで夜遅くまで研究に励む学生を「食の充実」を図ることで支援する。



創部初、アーチェリー女子日本代表選手の誕生 原田愛実選手がナショナルチーム入りを果たす

2023年11月に夢の島公園アーチェリー場(東京都江東区)で開催された全日本アーチェリー連盟主催「2024年ナショナルチーム選考会」に洋弓部の原田愛実選手(経営学部1年)が出場し、2024年女子日本代表選手に選出された。選考会出場選手はトップ選手ばかりで気の抜けない試合であったが、二日間におよぶ過酷な選考会スケジュールの中、原田選手は最後まで集中し見事代表の座を勝ち取った。日本代表選手に選出されたのは創部初の快挙である。



白味噌を使ったホテルメニューを開発 農学部・農学研究科×ウェスティン都ホテル京都

農学部食品栄養学科、農学研究科の給食経営管理
学研究室(朝見祐也教授)の学生8人が、農学部と
石野味噌が共同開発した白味噌を使ったメニュー
を考案。そのメニューをベースにウェスティン都ホ
テル京都のシェフと検討・試作を繰り返し、和食・洋
食・デザートに各一品がホテルメニューに採用され、
2023年11月に同ホテルで提供された。老舗ホテル
シェフ直々の指導は学生たちにとって普段の活動
では得られない大変貴重な経験となった。



建築の祭典「京都モダン建築祭」に参加 龍谷大学大宮キャンパスを公開

京都で大切に守り継がれてきたモダン建築を特別公
開する「京都モダン建築祭」が2023年11月に開催さ
れ、龍谷大学大宮キャンパスが参加。国の重要文化
財に指定されている1879(明治12)年建築の「本館」
「北翼」「南翼」「渡り廊下」「門扉」「旧守衛所」を特別
公開。創建当初の建築物がほぼ完全形で「群」とし
て全体景観を形成し、明治期の優美な姿を今に伝え
ている。公開日には文学部の教員、学生らがツアーガ
イドとして来場者を案内した。



女子バレーボール部が5年ぶりのV奪還 秋季リーグで11戦全勝優勝 関西王座に輝く 関西インカレでも2連覇の優勝を飾る

2023年9月9日から10月22日に開催された「関西大
学バレーボール連盟秋季リーグ戦女子1部」で女子
バレーボール部は11試合全勝での優勝を決めた。
秋季リーグ優勝は2018年以来5年ぶりの快挙。本
リーグでの優勝により4人の選手が個人賞を受賞。
最優秀監督賞を江藤直美監督が受賞した。翌11月
には「2023年度 Phiten CUP 関西バレーボール大
学男女選手権大会(関西インカレ)」に出場。2022
年に引き続き優勝し見事2連覇を達成した。



バドミントン部が全日本インカレで躍進 女子ダブルスは4連覇、 男子ダブルスは創部初の快挙

2023年10月に開催された「全日本学生バドミント
ン選手権(インカレ)」において、女子団体で3位、女
子ダブルスで優勝と準優勝、男子ダブルスで準優勝
を果たした。女子ダブルスは4大会連続優勝、男子
ダブルス準優勝は創部初の快挙。女子ダブルスの
優勝は田邊裕美選手(国際学部2年)と中出すみれ
選手(法学部2年)のペアが勝ち取り、男子ダブルス
の準優勝は西大輝選手(政策学部3年)と木田悠斗
選手(法学部3年)のペアが獲得した。



全国・世界へ挑む、柔道部女子の活躍 「全日本学生柔道体重別選手権大会」 「世界ジュニア選手権大会」

2023年9月30日から10月1日に日本武道館で開催された「第39回全日本学生柔道体重別選手権大会」の女子70kg級で溝口葵選手(経営学部3年)が日本一に輝いた。女子57kg級では武田優香選手(経営学部4年)が準優勝を果たした。また、10月にポルトガル・オディベラスで開催された「2023世界ジュニア選手権大会」の女子52kg級で神谷鈴選手(文学部3年)がオール一本勝ちという圧倒的な強さで世界一に輝いた。



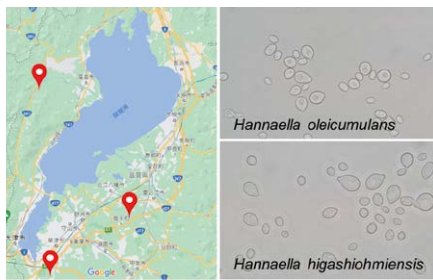
「第71回全日本吹奏楽コンクール(大学の部)」 4大会連続・通算14回目の金賞受賞 復興支援をするチャリティーコンサートを開催

吹奏楽部は2023年10月に開催された吹奏楽の最高峰の大会「第71回全日本吹奏楽コンクール(大学の部)」に関西代表として出場し、4大会連続・通算14回目となる金賞を受賞した。12月の定期演奏会では外園祥一郎氏を客演に迎え多くの聴衆を魅了した。また、2024年2月に石川県の金沢歌劇座で地元の高校にも出演していただき「吹奏楽フェスタin石川 令和6年能登半島地震復興支援チャリティーコンサート」を開催。復興の願いを演奏に込めた。



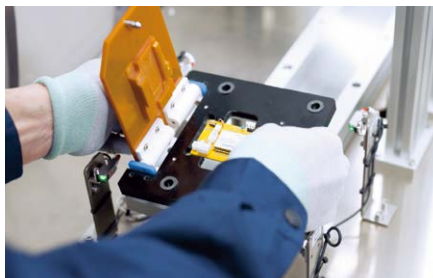
日本人学生と留学生の交流を促進 国際交流イベント「International Week」を開催

2023年度後期は深草キャンパスで10月16日、19日、20日の3日間、瀬田キャンパスは10月23日、26日の2日間で開催。計205人の学生が参加した。16カ国/地域の留学生たちは各ブースで自国の文化や伝統を紹介。母国に関する「True or False(ウソ?ホント?)クイズ」や母国のお菓子をふるまうなど、参加学生は各国ブースを自由に回って会話をし、国際的な視野や柔軟性、異文化コミュニケーション能力を向上させる機会となった。



滋賀県の土壌から新種の「油脂酵母」2種を発見 持続可能なバイオマス燃料化へ期待 日本の微生物資源の可能性の高さを示唆

農学部生命科学科の島純教授と京都大学の共同チームが、滋賀県東近江市などの土壌から糖や多糖を油に変える新種の油脂酵母を2種類発見した。稲わらなどを油に変えることから、酵母を使った油脂生産は地球環境に優しい持続可能な社会作りに貢献する有望な技術として期待される。本成果は2023年9月に国際学術誌『International Journal of Systematic and Evolutionary Microbiology』にオンライン掲載された。



福祉×工業で障がい者の工賃向上へ 政策学部 深尾研究室の学生が取り組む 「工福連携プロジェクト」

最低賃金が保障されていない「就労継続支援B型事業所」に通う障がい者の生産性を高めて工賃の底上げに繋げることを目的として、政策学部深尾昌峰研究室と本学ユナスソーシャルビジネスリサーチセンターは、南山城学園（京都府城陽市）と共同で、産業用ロボットと障がい者就労を組み合わせて新しい仕事を創出する「工福連携プロジェクト」を2021年に発足。2022年11月にセンサーデバイスの製造ラインを同学園に導入した。



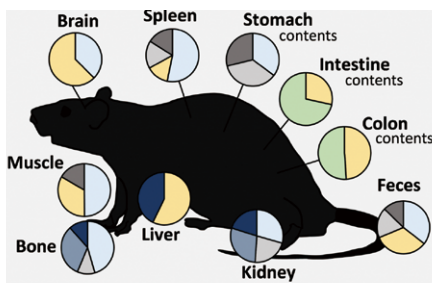
龍谷大学公式Webサイトをリニューアル 社会課題の本質にフォーカスする 新コンテンツ「BEING」をトップページに開設

2023年10月、本学の長期計画「基本構想400」に関する取組の発信力を強化するため、大学公式Webサイト（日・英）のトップページをリニューアルした。今回のリニューアルでは、デザインやユーザーエクスペリエンス（ユーザー体験）を向上させ、モバイルとデスクトップ両軸を意識した柔軟でシンプルなページ構成へと更新。また、トップページに新規コンテンツ「BEING～社会と自己の在り方を問うメディア～」を開設して情報発信力を高めた。



「鮎寿司」の微生物研究をきっかけに生まれた 一匹から作れる「簡易フナズシ製造キット」 伝統食文化の普及と定着をめざして

滋賀県の郷土料理「鮎寿司」を家庭で手軽に作れる「簡易フナズシ製造キット」を龍谷大学発酵醸造微生物リソース研究センターが企画・開発した。塩漬けにした鮎とご飯を食品保存用圧縮袋に入れ空気を抜いて保管。完成までの間、発酵の様子や微生物のはたらきを見て触って学ぶ教材にもなる。誰でも簡単に「鮎寿司」作りに取り組めるため、伝統的な発酵食に対する関心が復活し、需要が拡大することが期待できる。



先端理工学部藤森崇准教授らの 国際共同研究グループが 世界初、野生ラットで鉛化学種の体内分布を報告

先端理工学部環境生態工学課程の藤森崇准教授と5機関の専門家らとの国際共同研究グループは、深刻な鉛汚染で知られているザンビア共和国カブウェ地域の野生ラットを対象に、野生ラット体内の鉛化学種の分布を世界で初めて明らかにした。野生生物の鉛含有量と化学状態を理解することで、その移動性や安定性などの特性を議論する目的がある。本成果は2023年11月に国際学術誌『*Science of the Total Environment*』にオンライン掲載された。



「使えないリン」を活用したレタス栽培に成功 本学初、農学部生が優秀発表賞を受賞 「第119回日本土壌肥料学会関西支部講演会」

土壌肥料に関する研究や技術情報を発表・交流する「第119回日本土壌肥料学会関西支部講演会」が2023年12月に開催。農学部農学科土壌学研究室（森泉美穂子教授）に所属の4年生、田淵宏介さん、木下純花さん、伊藤峻さん、芝田旺友さんの共同研究が本学初の優秀発表賞を受賞した。研究テーマは『レタス栽培におけるポリアクリル酸Naの難溶性リンの吸収促進効果』。資源循環に配慮した新たな農法の提案が審査員から高く評価された。



分身ロボット「OriHime」も参加 「大学の社会的障壁」とこれからの学生が語る 「第6回共生のキャンパスづくりシンポジウム」

全ての学生・教職員が互いに「助け合える」キャンパスづくりについて考える「第6回共生のキャンパスづくりシンポジウム」を2023年12月に深草キャンパスで開催。「知っていますか？みんなで作る共生のキャンパス」をテーマに参加者は活発な報告と意見交換をおこなった。また、会場には分身ロボット「OriHime」が登場。「分身ロボットカフェ」で遠隔勤務する卒業生が新たな社会参加の可能性や学生時代の取組について語った。



新しい文学・アート体験 文学と障がい者アートのコラボレーション 「交差するイメージ 文学とアート」展を開催

2023年12月に大宮キャンパス本館で障がい者アートと文学作品を並べて展示する「交差するイメージ 文学とアート」展を本学ユネスコソーシャルビジネスリサーチセンター主催（企画者：松本拓く客員研究員）で開催した。国内外で高く評価されるやまなみ工房（滋賀県）と日本の障がい者アートを牽引してきたたんぼの家（奈良県）が作品を出展し、そのイメージに合う文学作品の選定を本学文学研究科生がおこなった。

学部長・研究科長の就任について

次期学部長等を選出しましたのでお知らせします。

今回新たに選出された学部長等は（新規）、再任された学部長等は（継続）と表記しております。（任期：2024.4.1～2026.3.31）

経済学部長（新規）
兵庫 一也（ひょうごかずや）

法学部長（新規）
越山 和広（こしやまかずひろ）

国際学部長（継続）
清水 耕介（しみず こうすけ）

法学研究科長（新規）
武井 寛（たけい ひろし）

経済学研究科長（新規）
大原 盛樹（おほはら もりき）

経営学研究科長（継続）
坂本 雅則（さかもとまさのり）

国際学研究科長（新規）
Sylvain Cardonnel（シルヴァン カルドネル）

10 Book Café

新刊紹介

*は大学から出版助成を受けた書籍です。
著者編者等は本学関係者のみ、お名前を掲載しております。



『スポーツ栄養学
—スポーツ現場を支える科学的データ・理論—』
石原 健吾(農学部教授)共訳
大修館書店/9,570円(税込)



『西洋古典名言名句集』
田中 龍山(文学部教授)共訳
京都大学学術出版会/2,640円(税込)



『ぼくらの冒険記
—親子で語る「前向き」休学のススメ—』
原 俊和(事務職員)共著
パレード/1,320円(税込)



『市民が育む持続可能な地域づくり
—地域メディアの役割と文化拠点としてのミュージアム—』
松浦 さと子(政策学部教授)共著
同時代社/2,750円(税込)



『本願寺と鉄道の近代史*』
中西 直樹(文学部教授)著
三人社/5,280円(税込)



『ひらかれる公共資料
—「デジタル公共文書」という問題提起—』
瀬畑 源(法学部准教授)共著
勉誠社/3,520円(税込)



『語り(ナラティブ)を生きる
—ある「障害」者解放運動を通じた若者たちの学び—』
林 美輝(文学部教授)著
見洋書房/3,080円(税込)



『山間の地に暮らして
—口バート・フロスト詩集—』
藤本 雅樹(龍谷大学名誉教授)翻訳
小鳥遊書房/2,420円(税込)



『システムズアプローチのものの見方
—「人間関係」を変える心理療法—』
吉川 悟(心理学部教授)著
遠見書房/5,060円(税込)

広報誌「龍谷」

「Ryukoku-Action 2023」

構想400のアクションを訴求することを目的として、「Ryukoku-Action 2023」の動画を制作いたしました。ポジティブな循環を生み出す学生主体の「#ツナガルアクリルプロジェクト」や島津製作所と連携した自己循環型リサイクルへの参画、協働型ロボットを活かした事業モデルの構築や老舗企業との商品開発など、本学の特徴的な教育・研究・社会貢献を映像で紹介しています。

<https://www.youtube.com/watch?v=R6ZmVJwpzGQ>



「龍谷大学の歴史」紹介動画

急速に変化する時代の中、様々な困難に直面するも「進取の精神」を絶やすことなく地域や社会の発展に力を尽くしてきました。

本動画では、長い歴史を通じて本学に所蔵されている重要な文化財なども紹介しています。積み重ねた歴史を大切にしながら、少し先の未来2039年に迎える「創立400周年」への想いを込めた内容となっています。

<https://www.youtube.com/watch?v=F3l3pzRMuA8>



広報誌「龍谷」97号読者アンケート&プレゼントのご案内

今後の広報誌づくりのため、皆さまのご意見をお聞かせください。アンケートにご協力いただいた方の中から抽選でご希望の読者プレゼントが当たります。お寄せいただいた感想・近況は「読者のひろば」に掲載させていただくことがあります。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。

締切 2024年6月28日(金)

Web応募フォーム

<https://www.ryukoku.ac.jp/enquete/>



龍谷ミュージアム ペア招待券 … 10組20名様

読者プレゼント

ハガキでご応募の方は、ご希望のプレゼント名を明記した上で、住所・氏名・年齢・職業・電話番号・(龍谷大学卒業生は卒業年度・学部)および広報誌「龍谷」の感想・意見、近況などを書き添えてご応募ください。

※いただいた個人情報には広報誌「龍谷」の編集以外の目的には使用いたしません。

読者アンケートのあて先

龍谷大学 学長室(広報)

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

電話 075 (645) 7882 FAX 075 (645) 8692

E-mail: kouhou@ad.ryukoku.ac.jp



経営学部藤岡ゼミ×(株)マンドリル
レトルトカレー「ぶどう山椒をかけて食べるカレー」… 5名様
※3種類の中からいずれか1種類をお届け。

読者のひろば

広報誌のデザインがオシャレなので、読む気が湧く。サイズもちょうど良く読みやすい。卒業しても大学の状況がわかるのでうれしい。

(卒業生 Hさん)

私が在籍していた頃と大学の雰囲気も随分変わっており、ホームカミングデー等で見に行ってみたいなと強く感じました。

(卒業生 Mさん)

広報誌「龍谷」のデジタル版配信について

広報誌「龍谷」はデジタル版でも閲覧していただけます。冊子版の送付を希望されない方は、下記URLまたはQRコードからメールマガジン登録をお申し込みください。ご登録いただいたメールアドレスにデジタル版発行のご案内をお届けします。

広報誌「龍谷」デジタル版配信(メールマガジン登録)

<https://www.ryukoku.ac.jp/prdigital/>



広報誌「龍谷」デジタルライブラリー

(過去の広報誌もご覧いただけます)

<https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/>



編集委員：井上 辰樹、木村 睦、野呂 靖、松永 敬子

事務局：田中 雅子、山田 美由紀

広報誌「龍谷」97号

2024年3月22日発行

編集：広報誌「龍谷」編集委員会

制作：龍谷大学 学長室(広報)

発行：龍谷大学

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

電話 075 (642) 1111(代表)

龍谷大学ホームページURL

<https://www.ryukoku.ac.jp/>





公式 X 「龍谷大学広報」

twitter.com/ryukoku_univ_pr



公式 Instagram 「龍谷大学」

www.instagram.com/ryukokuuniversity



公式 Facebook 「龍谷大学」

www.facebook.com/RyukokuUniversity/



公式 YouTube 「龍谷大学」

www.youtube.com/user/RyukokuUniversity